カイロっ子に託された夢
――下町の民衆を信じたある作家の試み

八木久美子

1　はじめに

エジプトの首都、カイロ。騒々しく、雑然とし、慣れぬ目にはなんの秩序もないかに見える。あらゆるものが混在し、人々であふれかえっている。アフリカ大陸最大の都市、もちろんアラブ世界でも最大の都市だ。現在の人口は約七百万と言われるが、それは正式に登録している住人の数にすぎないという。実際に生活しているのは、時には二千万人近いともいわれる。地方からの出稼ぎ労働者やその家族が帰るあてもなく定着し、カイロの周辺にはスラム化した地域が拡大している。第三世界の例に漏れず、エジプトでは都市と農村の格差が大きい。首都、カイロには農村にはない何もかもがある。この町でチャンスをつかもうと、あるいはなんとか今日明日の糧を手に入れようと人々は懸命になる。そこではさまざまな背景を持った人々が生活していることが、私のようなよそ者にもすぐにわかる。

しかしカイロという町のことを思うとき、いつも不思議に感じるのだが、この町は大都会でありながら、東京やニューヨークとは違う何かを持っている。大都会の活気につきもののせわしなさや騒々しさを備えながらも、そこに暮らしている人々の間に都会人特有の冷たさ、他人への無関心さはない。誰もが周りの人々に関心を示し、関わり合いを求め、新しい人間関係を作る努力を瞬時も怠らないかのようだ。この町の人々は私のような異邦人すらも放っておいてはくれない。とにかく関わり合いを求める。来訪者を歓迎し、そして「あなたは誰？何をしているの？」と問いたげな好奇心に満ちたまなざしを向け、次には話しかけてくるのだ。こうした濃密な人間関係を求める人々に触れたとき、私は「今、自分はエジプトにいるのだ」と感じる。カイロはまぎれもなく、エジプトである。

2　カイロっ子、ナギーブ・マフフーズ

この町に生まれ育った一人の作家がいる。アラブ世界を代表する小説家、ナギーブ・マフフーズ（一九一一～）である。彼はそのほとんどの作品をカイロの町を舞台にしている。短期間外国に旅行することさえ厭うほどに祖国のエジプトを愛するが、とくにカイロの町には格別の思いを抱く。ここにはエジプトの魂がある。ここにはエジプトの未来がある。マフフーズはカイロの町をそう見る。

父親は下級役人で、兄弟はすべて高等教育を終了している。

マフフーズ自身は、エジプト一の大学であるカイロ大学の前身、エジプト大学で哲学を学んでいる。おそらく一家の生活ぶりは、教育ある都市の下層中産階級の典型であっただろうと思われる。この階層は社会的には、王家のムハンマド・アリー家に代表される外国系の上流階級と、読み書きもおぼつかない者が多くを占める土着のエジプト人からなる下層階級の中間に位置し、近代エジプトの知的活動の担い手を多く輩出した階層である。

マフフーズはカイロの旧市街にある下町のガマーリーヤ地区に生まれている。もしも今ガマーリーヤ地区を訪れて、建物の様子やそこからかいま見える人々の生活ぶりを目にすればすぐにわかるだろうが、この一帯は現在では全体として住宅地としては中流よりも下の階層の人々のものとなっている。ただマフフーズの記憶に残るガマーリーヤ地区は、現在のこの地区の様子とはかなり違っている。マフフーズがまだ暮らしていた頃のこの地区は、大邸宅に生活する裕福な人々からならず者までありとあらゆる類の人々が混在していた。祝祭の折には金持ちが自宅の門戸を開き、近所の貧しい人々にごちそうをふるまい、多様な人々が互いに関係を保ちながら日々の暮らしを送っていた。マフフーズの暮らしていたこの地区は、いわばエジプトの縮図のようであったという。[1]

マフフーズが実際にこの地区で暮らしたのは、十代の半ばまでである。郊外に新しい住宅地が開発されたことを契機に始まった棲み分けの波に押されて、マフフーズの家族も少し離れたアッバーシーヤという新興の住宅地に居を移したのだ。ガマーリーヤは次第に昔日の面影を失っていく。しかしながらマフフーズは慣れ親しんだガマーリーヤへの愛着を捨てることがなかった。徐々に変わりつつも、他のどの地区にもない味わいを持つこの地区を彼は愛し続けた。マフフーズは高校時代から、友人の店に顔を出すということをきっかけに、この地区にある茶店通いを始める。エジプト人の男であれば、だれもが自分の店を持っているのが常識だ。まるで自分の居間、兼応接室であるかのように茶店を使う。新聞を片手に水煙草を吸いながら、常連客の友人がやってくるのを待つ。気が向けば店に備え付けられているバックギャモンやドミノに興じることもあるだろう。駆け出しの作家であったマフフーズが、志を同じくする同世代の若者と議論を交わすのもいつも決まった茶店であった。大学での修士課程を中途で辞め作家の道を志してからは、昼間は公務員として役所で働き、夜は執筆を行いつつ、彼は長年お気に入りの茶店に通い続けた。こうして、実際の生活空間は新興の住宅地に移った後も、マフフーズにとってのふるさとはこのガマーリーヤ地区であった。マフフーズは、自分はここに属していると感じる。彼は言う。「(作家には)感情や感性の出発点となるような場所や物とのつながりが必要です。[2]」「私と母は一九二四年頃引っ越して以来、アッバーシーヤに住んでいました。しかし、私が一番愛着を感じ、恋しく思うのはガマーリーヤなのです。[3]」

だからと言って、マフフーズはそこに存在するものすべてを無条件に肯定するわけではない。おそらくカイロの中で、この地区はもっとも保守的な空気が漂う場所のひとつであろう。ここに生きる人々は、あらゆる変化に対してかたくなな態度を見せるかもしれない。マフフーズのようなリベラルな知識人の語ることなど、聞く耳を持つ人はここにはいないかもしれない。しかしそうしたことをすべて含めて、そこにあるもの、そこに

ある問題はすべて自分のものであると引き受け、かつそこに流れる理屈を越えた感情の機微までも敏感に感じ取ることができるという意味で、この場所は彼の帰属する場所なのだ。

マフフーズが持つこの地区への愛着、いや執着と言うべきかもしれないこの強い感情は、この地区をして作品の舞台にし、かつそこに生きる多彩な登場人物たちの豊かな描写を可能にしている。しかしそれにとどまらず、マフフーズはこの地区に代表される旧市街を特徴づける「街区(ḥāra)」という世界の中にエジプトの真髄、もっともエジプト的なものを見ているのだ。マフフーズは言う。「街区にたいして私が持つ愛着は、私が文化的な真正性(aṣāla)にたいして持つ愛着の一部です。[4]」この点については後で再び議論するとして、ここではまず、マフフーズの思想的な背景を見ることから始めよう。

3　国民国家としてのエジプトに向けて

マフフーズの思想を理解するためには、一九一九年革命について語ることから始めなければならない。彼が生まれた時代のエジプトは、オスマン帝国の版図の一部でありつつ、アルバニア系のムハンマド・アリー王朝の下にあった。しかしそれと同時に一八八二年以降、保護領としてイギリスによる実質的な支配が行われるという何重もの支配の下にあった。一九一九年革命とは、こうした状況下で、イギリスからの独立を求めて全エジプトが一致団結して闘った民族主義的な運動である。宗教的帰属や社会階層を超えて、エジプト人が一致団結したといわれる。イスラムのウラマーとキリスト教の聖職者が互いに手を取り合い、宗教の違いを超えて共に闘うことを訴える。ふだんは外に出ることさえ希な上流階級の女性たちが独自にデモを組織し、一方では下町のならず者たちが反イギリスの示威行動を取る。この出来事はエジプト人が団結したときに発揮される力がイギリスという強大な敵を動かした歴史的事件として、のちのちまで語り継がれる。一九七〇年代以降、イスラム復興のなかで異教徒に対する差別的な動きやときには暴力的な攻撃が発生するたびに、「一九一九年革命の精神を忘れてはならない」という意見が繰り返し出された。一九一九年革命とは、民族の団結、国民統合の象徴としてエジプトの人々に共有された記憶である。

マフフーズは、この一九一九年革命の精神を高く評価する。もちろん、一九一一年生まれのマフフーズには、当時の記憶はその後の彼の人生を左右するほどの鮮明さと強烈さをもって残っているとはいえない。しかし彼が青年期を過ごした二十年代は、エジプトの人々の間でこの民族主義的な事件がいまだ鮮やかな形で記憶され、語られていた時代であった。実際、彼の両親は民族主義運動の指導者たちを無条件に敬愛し、あたかも神聖なものについて語るかのようにその名を口にしたという。彼は遅れてきたとはいえ、一九一九年革命の申し子であったのだ。革命の成果である一九二二年の独立は多くの深刻な問題を残しはしたものの、エジプトの歴史上初めて憲法が制定され、議会制度が導入されるという点では画期的であった。しかしこうした成果以上に、マフフーズの思想を理解する上で重要なのはこの革命を支えた思想であろう。一九一九年革命を支えたのはエジプトを国民国家として再定義し、近代的な国家として再生させようというエジプト・ナショナリズムである。政教分離を前提として、イスラム教徒もキリスト教徒も同じエジプト人

であるという立場をとる。[5]伝統的な意味でのイスラム共同体の一角としてエジプトをとらえるのではなく、ひとつの歴史、文化を持ち、ナイルの恩恵を受けて生活する人々の集まりとしてエジプトが考えられるのである。

作家としてのマフフーズは、このエジプト・ナショナリズムの文学的な発露となった「国民文学」(adab qawmi) の流れを汲む。「国民文学」は一九二〇年代に頂点に達した文学的な運動で、「エジプト的なもの」、「エジプトらしさ」、「エジプト性」、「エジプト精神」といったものを作品の中で描き出すことをその目的としていた。エジプトを有意味な単位として想定する根拠として、エジプト人を他の周辺の民族から区別することを正当化するようなにか共通の特性があること、そしてイスラムやキリスト教への帰属よりもエジプトという国への帰属を優先させる必然性があることを、できるだけ多くの人々にわかりやすい形で訴えることを使命とした。エジプトの自然はどれほど美しいか、エジプト人はどのようなすばらしい性格を持っているか、エジプトは人類の歴史にどれだけ貢献してきたかが、詩や小説の中で語られるのである。[6]マフフーズが作家としての活動を始める一九三〇年代にも、この運動はいまだに影響力を保っていた。

この「国民文学」を特徴づけるもののひとつとして、民衆への関心という点がある。それまで文学とはなんの関連も持ち得ない存在として黙殺されてきた民衆に対して初めて向けられたこの関心は、「純粋な」エジプト人の精神、エジプトらしさを探し求める営為から生まれた。民衆、とくに農村部の農民たちは、外界との接触が極端に限られた生活を何世代にもわたって続けているがゆえに、西洋近代に代表されるような外からの影響をほとんど受けておらず、ときには古代エジプトに源を発する慣習を守り続けているとすら解釈されたのである。[7]

しかしマフフーズは、この民衆へのまなざしを基本的に共有しつつ、農村ではなく自分が知っているカイロの町に向かっていく。カイロっ子である彼には、農村の農民の生活を書くという選択肢はなかった。カイロで生まれ育ち、いわゆる「いなか」も持っていない彼には農村とのつながりが全くと言っていいほどなかった。彼にとって、カイロが彼の知るエジプトのすべてであった。

しかしそれと同時に、彼はカイロを誰よりもよく知っていた。おそらく、カイロすなわち西洋化された町、農村すなわち純粋なエジプトという単純な二項対立の図式は彼のものとはなり得なかったのだろう。カイロを西洋からの波に洗われるエジプトの象徴としてひと括りにしてしまうには、彼はあまりにもカイロの内側に身を置いていた。もちろんカイロには、地方の村や町にはない西洋的、近代的な文物があふれている。外国人の姿も珍しくはない。しかしこうした西洋から持ち込まれた文物の影響で、生活のスタイルや価値観まで変わってしまったのはほんの一握りの人々であったという現実をマフフーズは知っていた。フランス的な風俗やイギリス風のふるまいを目にし、ときには憧れの感情を抱きながらもそうしたものを受容せず、他者に属するものとして見続ける人々が多くいたのである。マフフーズはカイロの下町の民衆に目を向ける。

しかし、実際には彼の作品の中心に位置するのは、厳密には民衆と呼ぶにはふさわしくない中間層の人々である場合が多い。中には『ミダック横町』(1947) のように明らかに下町の民衆の

世界を描いた作品もあるが、『新しいカイロ』(1945)や彼の代表作である『バイナル・カスライニ』(1956)『カスルッシャウク』(1957)『アッスッカリーヤ』(1957)の「三部作」では、マフフーズ自身の姿と重なっているような教育ある中間層の人々が主人公である。しかしここで看過してはならないのは、そうした主人公達の生活を彩る、旧市街の古い茶店の主人、小さな商いをする商人たち、宴会に花を添える踊り子、そして人々の家に呼ばれるコーラン読みなどが入念に書き込まれているという点である。つまり、こうした主人公達の生活が、古くから続くカイロの伝統的な雰囲気の中にあるものとして書かれているのだ。「三部作」の主人公はマフフーズ自身を彷彿させる下層中産階級の知的な青年であるが、彼の生活は旧市街の空気にどっぷりと浸かっており、彼は上流階級の友人の西洋風な生活に違和感を持つ。こうした操作を施すによって、主人公の思考の流れや感情の動きが、民衆から切り離された環境のなかで発生したものではなく、マフフーズが考えるなりの「エジプト的」な土壌の上で成立したものであることが語られている。

4　ナショナリズム、社会主義、そしてスーフィズム

先に述べたように、マフフーズは一九一九年革命の精神、エジプト・ナショナリズムを支持する立場を取る。しかし早くも一九三〇年代にはすでに、エジプト・ナショナリズムはその足下から揺らぎ始めていた。一九一九年革命の成果であるところの立憲制、議会制民主主義が期待された通りには機能しない。政治家は党派争いに明け暮れ、一貫性のある政策は皆無である。独立によって実現するかと思われた社会改革はいつまでも絵に描いた餅のままであった。独立が名ばかりのものであり、依然としてイギリスによる実質的な支配が続いていることも社会全体をいらだたせる。こうした状況を前にして祖国の将来を憂う政治意識の高い青年層の間には、新しい方向性を求める動きが登場する。共産主義、社会主義など左派の思想に向かう者もあれば、多くはムスリム同胞団などイスラム主義の思想に惹かれていった。一九三〇年代、つまりマフフーズが二〇代であったころのエジプトは、社会的、政治的には混乱のただ中にある一方で、思想的には多彩を極めた時代でもあったのである。

この時代、マフフーズは彼の最大の恩師であるサラーマ・ムーサの影響で、社会主義に関心を持っている。[8] ただ彼が関心を示し支持した社会主義とは、その師の社会主義理解に沿って、きわめて倫理的、そして穏健な改良主義的なものとしての社会主義であった。一つの階級の独裁を掲げることなく、エジプト人同士の階級闘争を否定するそれは、エジプト・ナショナリズムとなんら齟齬をきたすものではなかった。自由と平等を軸とし社会正義の実現を目指す思想としての社会主義に対するこの信頼は、マフフーズは晩年になっても変わることなく持ち続けている。しかし、彼が抱いていたこの社会主義およびエジプト・ナショナリズムに対する信頼は、一度も揺るがなかったというわけではない。その有効性の再検討へ彼を促す経験は、二段階でやってくる。

まずはすでに言及した、一九三〇年代の政治的、社会的な混乱が生み出し、あるいは拍車をかけた社会全体が見せた宗教回帰の傾向である。たしかに一九一九年革命のさなかでは、エジプトの人々は宗教的帰属の別を超えて団結し、共通の敵である

イギリスを前に一丸となって英雄的な抵抗運動を見せた。先にも触れたとおり、この現象は知識人階級に限らず、いわゆる民衆のレベルにも共通してみられた。しかしながら、独立が達成され一時の激しい民族的な感情の高まりが消えると、事態は変化を見せた。政治の破綻は新しいイデオロギーへの失望や疑念を生み、票集めの有効な手段として政治家の言説の中には宗教が戻ってきた。政教分離を前提にした国民国家としてのエジプト建設を目指すエジプト・ナショナリズムという思想は、少々の嵐では倒れぬまでに深くエジプトの土壌に根を下ろしたというのは幻想であった。たしかにエジプト・ナショナリズムは知識人の間では力を持った思想であった。しかしそれは、エジプト・ナショナリズムがエジプト社会全体において政治思想として受容され、確立したということではなかった。民衆の間で強大な影響力を発揮し、問われることのない正統性を維持しているのは依然として宗教的な価値であることが見えてくる。

これと同じようにエジプト社会における知識人の位置についてマフフーズに考えさせる契機となったと思われるのは、一九五二年のナセルら「自由将校団」による革命および彼らの取った体制である。この革命が先の一九一九年革命とは思想的に直接には何の関係もない軍人の手によって一見いとも容易く実現したという点は、一九一九年革命の精神を受け継ぎつつ、エジプト社会の再生への道を懸命に探り続けてきた知識人達には衝撃であっただろう。また、ナセルが民衆から圧倒的な支持を受け、そのカリスマ性によって強大な力を発揮する光景は、無力感を植え付けたであろう。さらに、ナセルは体制の外に身を置く知識人には一切の批判を許さず、言論の自由を封じ込めていく。社会の未来を見定める使命を解かれ、かつ民衆とも切り離された知識人は、まさしく社会における存在理由を否定されたに等しかった。

マフフーズは、革命からの数年間、沈黙を守り続ける。この沈黙について彼自身による明確な答は出されていないが、ただ、彼が与えてくれるわずかな説明の言葉からも、そしてまたこの沈黙の後の作品が見せる新しい展開からも、この間彼の精神が眠っていたわけではなく、彼がこの衝撃を乗り越え先へ進もうと格闘していたのは明らかである。

この沈黙の期間の後に発表される一連の作品を読む者が最初に気づくのは、宗教的、精神的な要素が多様な形で姿を現しているという点であろう。その裏にあるのは、それまで一貫してマフフーズが表明してきた、科学的な思考や手段こそが社会を改革するという科学への楽観的な信頼の霧散である。多くの論議を呼んだ『我が町内の子どもたち』(1959) は執筆活動再開後、最初に発表された作品であるが、この作品では科学者に近代という時代の預言者としての使命を負わせつつも、最終的なメッセージは、信仰を持たない科学者の危うさへの警告と、宗教が科学の根底を支える必要の訴えにある。これに続く一連の作品では、さらに科学の位置が後退する。あるいは科学に対する関心そのものがいったん姿を消すと言った方が正しいかもしれない。その代わりにというのであろうか、これらの作品には、イスラムの神秘主義、スーフィズムの影響が強く出てくる。主人公たちは、なにか確かなもの、絶対の信頼の対象となるものを探し求めて彷徨う。絶対の真理とは何なのか、ふと沸いた疑問から自由になれず、答を求めて彷徨う彼らの姿は、神を求めて修行を積むスーフィーの求道者と重なりあう。エジプト社会

に正面から取り組んできたマフフーズが、この時期はひたすら人間の内面に入り込んでいく。

しかし、マフフーズのこうした姿は長くは続かない。あたかもスーフィーが神との合一という神秘体験を経たあと、生まれ変わってふたたび日常世界に戻ってくるように、彼は着実にその歩みをエジプト社会に戻していく。知的な格闘を経て、スーフィズムへの関心を一連の作品の中で吐露した後にマフフーズが行き着いた思想は、かつて彼がエジプト社会の将来を導く思想として支持したエジプト・ナショナリズム、そしてサラーマ・ムーサから学んだ社会主義を継承しつつも、さらにそれらを超えて新しい展開を示すものであった。それは、エジプト・ナショナリズムや社会主義といった思想をエジプトの民衆に受け入れられる形にするにはどうすればいいのかという問題への一つの答となっていた。マフフーズは、それまでの思想を「社会主義的スーフィズム（*al-taṣawwuf al-ishtirākī*）」という一種イスラムの装いを施した新しい形で提出し直す。[9]

なぜスーフィズムというイスラムの特定の流れなのかについては、紙幅が限られておりここでは詳細に議論できないが、その一つの理由はスーフィズムが民衆の生活にもっとも深く根ざしたイスラムの流れであるという点にある。[10]これを踏まえ、自らの信念を民衆にも共有されうるよう練り直そうとしたマフフーズの努力はどこへ行き着いたかを見て行きたいと思う。それがもっとも明快な形で示されているのが、『ハラーフィーシュの詩』（1977）という作品である。

5 『ハラーフィーシュの詩』

『ハラーフィーシュの詩』は十章から成っており、アーシュール・ナージーという祖先を持つ一族とこの一族が生活する街区の歴史を辿っている。街区の歴史の軸となっているのは、支配者集団である若者組、フトゥーワ（futuwwa）と被支配者あるいは一般民衆、ハラーフィーシュ（ḥarāfish）の関係である。フトゥーワおよびハラーフィーシュのふたつの用語については後で論じるが、以下では便宜上、それぞれ「若者組」、「民衆」という訳を充てる。

この物語の最初に登場する祖先のアーシュールという男は、子どものない盲目のシェイフに拾われた捨て子とされているが、彼が拾われたのがスーフィーたちの修道場であるタキーヤの前とされている点は示唆に富む。タキーヤは登場人物達の精神生活の要であり、作中、大きな象徴性を持った存在となっている。精神性の高い登場人物達はみな、このタキーヤから聞こえてくる詩に心を惹かれる。[11]アーシュールが拾い上げられたのがまさにこのタキーヤの前であったということは、街区にとって彼の存在が意味するところを暗示している。彼がのちに街区で聖者と呼ばれることは、すでにこの時予告されているのである。

彼はシェイフとその妻の暖かい愛にはぐくまれて、正直で優しい心を持った強い大男に育つ。幼い頃から彼はタキーヤから聞こえてくる歌に惹かれ、近くに行っては耳を澄まして聴いていた。しかしある日、この幸せな日々は終わる。養父が死んで養母が故郷の村に帰ることになり、彼は行き場を失う。その時彼が足を向けるのは、やはりタキーヤであった。

彼は悲しさのあまり、いつにもまして真剣に修道場からの

詩に耳を傾けた。ちょうど彼の両親が他人の顔の影に隠れているように、その詩の意味もアラビア語ではない言葉の影に隠れてしまっていた。たぶん、彼はいつかだれかを、あるいはなにか意味を見つけるだろう。たぶんいつか、謎を解き明かし、喜びの涙を流すだろう。あるいは彼の願いのどれかがいつの日か、愛する人のなかに実現するだろう。[12]

絶望の淵にあってアーシュールはタキーヤの修道士たちに働き口を求めるが、中からは返答すら与えられない。[13]結局、アーシュールは荷車引きの職を手に入れ、その働きぶりを気に入ってくれた親方の娘と結婚する。二人の息子を儲けるが、ふとしたことから彼は飲み屋の酌婦と恋に落ち、彼女を第二の妻として迎え、一人の息子が生まれる。街区を疫病が襲う。夢に養母が現れ、アーシュールに荒野に避難するよう命じる。酌婦との結婚という醜聞によって評判の落ちたアーシュールの言うことなど耳を傾ける者はなく、彼は第二の妻と幼い息子だけを連れて荒野に避難する。三人はそこで半年間、ほとんど人との接触もなく隠遁生活に近い日々を送る。

彼（アーシュール）はほとんどの時間を祈りに使った。自分の家族のことや、街区の人々のことを考えて過ごした。彼は妻にこう言った。

「僕は今ほどに人々のことを愛したことはなかった。」

日中少し眠り、夜はずっと起きていた。とても長い時間、そしてとても深く瞑想し、彼はもうすぐ何かの声を聞き、精霊を見るだろうという奇妙な感覚を持つようになった。彼は星と夜明けの同伴者となった。彼は神に近いところにあると語った。何も彼を神からは隔てていないと。[14]

瞑想と祈りに時を過ごし、神秘体験を経て、神の被造物としての人間すべてに愛を向けるという典型的なスーフィーの姿がここにある。真に神を愛する者は、その被造物であるがゆえに、ただそのためにすべての人間を愛する。こうした人間像が理想的な支配者になる条件として示される。

半年が過ぎ三人が戻ったとき、街区にはすっかり人気がなくなっていた。ただタキーヤだけが以前と変わらぬ姿を見せていた。アーシュールと妻はふと、主をなくした一件の邸宅に足を踏み入れ、そこで生活を始める。突如として富を手に入れたアーシュールであったが、彼はその富を街区に戻ってきた人々のために惜しみなく使う。貧しい者に施し、モスクや水飲み場の建設に懸命になる。その姿を目の当たりにして、民衆は彼を聖者と呼び始める。彼はいつしか街区を支配する若者組の頭となっていた。

アーシュールは若者組の揺るぎない頭となった。民衆が予期していたとおり、彼はそれまでに例を見ないやり方で支配を行った。彼は元の職に戻って、昔のように地下の部屋で暮らすようになった。また、保護料を廃止して、手下には生活の糧は自分で稼ぐよう命じた。保護料は名士や金持ちにだけ課して、それを貧者や障害者に分け与えたのである。彼は近隣の若者組を抑え、我々の街区にこれまでなかったような正義と名誉と安定をもたらした。アーシュールは夜になるとタ

キーヤ前の広場に座り、歌声に魅了されながら、手を広げてこう祈ったものだ。「神よ、私の力を保ち、増して下さい。私があなたの良き僕たちのためにそれを使うことができますように。」[15]

しかしある日突然、アーシュールは姿を消してしまう。街区の民衆の必死の思いも通じず行方はしれないまま、彼の息子がその跡を継ぐ。しばらくは彼の精神が曲がりなりにも受け継がれていくが、次第に彼の一族以外の者が若者組の頭になることが増え、力に任せた抑圧的な支配が目に余るようになってくる。作品の中では、アーシュール一族の各世代、その時代の若者組の支配の様子が多様な人間模様を絡めて詳細に描かれるが、アーシュールの子孫たちの中でとくに挙げるに値するのは、ジャラール、ファトゥフル・バーブ、そして最後のアーシュールJr.の三人であろう。

ジャラールはアーシュールが姿を消した後、数世代後に登場し、久しぶりにアーシュールの一族から頭が出たと民衆を喜ばせる。しかし、頭としての地位と富を得て腕力にも恵まれながら、彼は不幸な死に方をした母の姿が忘れられず、死の恐怖から逃れられない。不老不死の秘密を知るという怪しげなシェイフの言うがままに代価を払い、言われたとおりに「モスクのないミナレット」を建て、一年間の蟄居を行うが、嫉妬に狂った愛人に毒を盛られあえなく死んでしまう。

なぜ、このような最期をマフフーズは彼に与えたのか。確かにジャラールは民衆が期待したようなアーシュールを思い出させるような公正な支配を行いはしなかった。しかし、彼は民衆をとくに抑圧し、搾取したわけではない。問題なのは、自分一人の救済に没頭していったということだ。彼は街区の命運には無関心だった。街区というひとつの社会に帰属意識を持たず、自己の魂の救済のみを追求する者の破綻という、マフフーズが以前から繰り返し作品を通して訴えていたメッセージがここに登場する。[16]

さらに二世代後登場するのがファトゥフル・バーブである。彼は偉大な祖先のアーシュールとは似ても似つかぬほっそりとした体躯をしていたが、しかし彼はこの祖先を深く敬愛していた。

学校への行き帰り、ファトゥフル・バーブはそこらじゅうでアーシュールを見る。アーシュールは彼の心をときめかせ、想像をかき立てて希望や情熱に火を点ける。彼はモスクでも、水飲み場でも、家畜の飼い葉桶のなかにもアーシュールを見るのだ。道でもタキーヤ前の広場でも彼を見る。いったい何度、アーシュールの目はこの古い壁や閉じた門、そして背の高い桑の木を見たことだろう。ちょうど彼がしているのと同じように。空気は未だに彼の吐息、つぶやき、そして希望や夢で潤っている。彼の秘密は未知なるものの向こうに隠れ、太陽の日差しもそれをさらし出すことはない。いつの日か、彼はきっと戻ってくる。[17]

ひ弱な体躯のファトゥフル・バーブには、よもや愛する先祖のようにフトゥーワの頭となって街区の人々を助けようなどという考えは浮かびもしない。しかし、彼の邪悪な従兄弟のサマハ

が頭となって行う支配はあまりにも許し難いものだった。サマハは飢饉の噂が流れる中、穀物を買い占めて値をつり上げて荒稼ぎをし、人々を飢えに追いやっていく。ついにファトゥフル・バーブはサマハの倉庫から食料を盗み出し、「アーシュールから」との言葉を添えて、闇に紛れて民衆に食料を配り始める。結局サマハに見つかり殺されそうになるその時に、真相を知った街区の人々が立ち上がり、彼を救出してサマハとその手下を倒す。

こうしてファトゥフル・バーブが、結果的には民衆を率いる形で若者組を倒し革命に成功するのである。しかしこの平和は長続きはしない。ファトゥフル・バーブは己の力の限界を知り、新しい若者組の頭になることを望まないが、周りの者に担ぎ出され意に反して頭になる。しかし取り巻き連中は彼の人気を利用するだけで、邪魔になるや否や彼を排除することに躊躇はない。彼が惨殺死体で発見されるのはまもなくである。

このファトゥフル・バーブの命運をどう理解すべきか。おそらく答に近づく手助けとなるのは『我が町内の子どもたち』でマフフーズがイエスの姿を重ねたリファーアと、ファトゥフル・バーブとの類似であろう。どちらも人々に対する愛、正義を愛する気持ちでは他に並ぶ者がない。しかし彼らには腕力であれ、カリスマ性であれ、人を有無を言わせず従わせるような強い力が欠けている。それがゆえに弱者からは敬愛を受けながら、邪悪な強者の前に倒れる。気高い精神だけでは良い社会、徳ある社会は実現、存続し得ない。加えて法を施行し人々を率いていく強い指導力、敵対する邪悪な力に立ち向かう力も指導者には必要だということだ。ここにイエス、そしてムハンマドについてのイスラムの伝統的な見方をかいま見ることもできるだろう。

最後に物語を締めくくる形で登場するのは、その名も偉大な祖先と同じ、アーシュールJr.である。彼の時代もやはり街区は邪悪な頭によって支配され、人々は苦渋を味わっていた。父親のないアーシュールJr.の家族は貧しく、長兄は悪事に手を染める。それが明らかになったとき、残された家族は街区を追われ、その外にある墓地へ移り、ひっそりと隠れるように暮らすことになる。次男も惨めな生活に愛想を尽かし、町で一旗揚げようと一人去っていく。残されたアーシュールJr.は母親とそこに止まり、自分の家族の悲惨さを街区の置かれた窮状と重ね合わせて、祖先のアーシュールの時代に思いを馳せる。彼が荒野に出て瞑想をすることを好むのは、祖先と同じである。

アーシュールJr.は、空いた時間を荒野で過ごすのに飽きることはなかった。そこは自分には家畜を追う場所だが、約束の主である祖先のアーシュールが身を隠し、祝福を受けた場所でもあるのだ。彼が愛し、その約束を信じ、その善行と強さを敬愛しているあの先祖のアーシュールが。彼は善い行いが好きで、腕力もある。そのことで先祖に似てはいまいか。しかしその善良さと力とで何をするというのだ。先祖の方は奇跡を起こし、彼はといえば、きゅうりやナツメヤシを持って歩き回っている。[18]

ある夜、ついにアーシュールJr.は瞑想中に祖先の姿を見る。

微笑んではいたが、明らかに責めるような口調で彼に尋ねた。

「私の手で、それともおまえの手で。」

この問いを二度繰り返した。
アーシュールJr.はあたかも何を訊かれているのか判ったかのように自分が答えているのに気づいた。
「私の手で。」
まだ微笑んだままではあったが、祖先のアーシュールはあたかも怒っているかのように、彼を置いて姿を消した。[19]

この夜の経験を経て、アーシュールJr.は動き出す。街区に隣接した市場に久々に出かけ、そこで民衆に語りかける。邪悪な若者組の支配を終わらせるべく自分たちの力だけを信じて立ち上がることを訴える。彼には先祖の実現した理想社会がなぜすぐに潰えたかがわかっていた。聖者と呼ばれるようなひとりの英雄が現れて作り上げた理想的な社会は長続きはしない。そうした社会はその英雄が存在する限りにおいてのみ存続し得るのだ。その人物が姿を消したとたん、この理想的な社会も消え、人々に語り継がれるだけの夢となってしまう。恩恵として受け取るのではなく、人々が自らの手で勝ち取るのでなければ、どんな徳ある社会も続きはしない。

革命は成功する。アーシュールJr.は新しい若者組の頭になる。彼は先祖がかつて実現した社会を手本にしつつ、新しい試みを始めた。彼は民衆に自分の目的を理解させ、子どもたちにもそれを教えることを求めたのだ。指導者だけが高い理想を持ち、他の人々はそれを理解しないまま、ひたすら恩恵を受けるという、かつて彼の祖先が実現した社会のあり方はここに否定されている。

アーシュールJr.はさらに、悪霊が住むとして恐れられていた、ジャラールの建てた「モスクのないミナレット」を破壊する。ミナレットが倒れた日、街区ではそれを祝う宴が開かれる。宴のにぎわいを遠くに聴きながら、アーシュールJr.はタキーヤ前の広場に向かい、瞑想に耽る。

闇のなかをなにかきしむ音が響いた。驚いて、彼はその巨大な門を見つめた。それがゆっくりと少しずつ開くのを見た。そこから、あたかも夜の吐息が形を取ったかのような修道僧の人影が近づいてきた。彼の方に身を寄せながら、囁いた。

「横笛と太鼓の用意をしなさい。明日、長老がお隠りから出ていらっしゃる。光の中で街区を歩かれるだろう。そしてすべての若者に、竹の棒と桑の実を与えられるだろう。さあ、横笛と太鼓を用意しなさい。」[20]

こうして街区の歴史を通じて一度たりとも門を開くことのなかったタキーヤが明日、その門を開き、街区の人々に祝福を与えることを約束するところで物語は終わっている。

6　旧市街、下町という空間

フトゥーワ、ハラーフィーシュというふたつの集団については、それぞれ「若者組」そして「民衆」という語を充てたが、敢えて特殊とも言えるこのふたつの集団を作品に登場させることで何が意図されるのだろうか。両者はマフフーズがとくに街区という場所をこの作品の舞台として選択した、その理由と密接に結びついている。

フトゥーワとは、元来の「男らしさ、若者であること」とい

う意味から派生した語で、通常、若者組、やくざ、任侠集団などの訳語が充てられ、街区ごとに形成された、力自慢、腕力を誇る男たちの集団を指す。最近のカイロの町ではほとんど忘れ去られたに近い存在であるが、街区という高い自律性を持った共同体の事実上の支配者として二〇世紀の前半までは旧市街の下町を中心にして民衆の生活と密接に結びついていた。[21]これに関して重要なのは、El-Messiriが指摘しているように、この集団は街区の人々に対して、搾取者でありかつ庇護者であるという両義的性格を持っているということである。他の街区のフトゥーワの暴力から保護する代価という名目で人々から金品を巻き上げ、腕力に任せて横暴の限りを尽くすこともあれば、実際に外側からの暴力や収奪から身を張って街区の人々を守るという心意気を見せもする。作品の中のフトゥーワが二人のアーシュールに率いられたもののように理想的な支配を行うこともあれば、収奪者の集団と化すことがあるというように多様な性格を帯びるのは、フトゥーワの実像から遠いものではない。

フトゥーワのこうした社会的位置に加えて忘れてはならないのは、彼らの権力が外部のなにかに依拠するものではなく、街区の中から力対力の闘いのなかで勝ち取られたものであるということだろう。外部からの攻撃に対して街区を護る者は力のある者でなければならないのは当然の論理だ。この論理に従って、フトゥーワの頭の地位には、街区の誰もが挑戦することが可能である。衰えた者は権力の場を去るしかない。作中、頭の地位は世襲とはされていなかったことも思い出しておこう。ある男がなぜフトゥーワの頭として権力を振るっているのか、その正統性の根拠が社会の内側にある。フトゥーワ、およびその頭という存在は、街区という土壌、その文化から生まれたものなのである。この点において、外の権力、たとえば国家権力がまったく異質なものと位置づけられていることは、作品のなかで街区の人々が官憲の判断に対して見せた冷ややかな反応があきらかにしている。祖先のアーシュールは荒野から街区に戻ってきて他人の邸宅に住み着き、その富を貧者に分け与えるが、そのことが当局に発覚してしばらく獄に身を置く。しかしながら、刑期を終えて帰ってきた彼を人々は英雄のように歓迎し、ふたたびフトゥーワの頭として迎える。彼が当局の目から見れば「犯罪者」であることなど、街区の人々は問題にしない。それどころか、元の所有者がいなくなってしまった富を貧しい者に分配する、その行いは彼らの目には正義としか映らない。

この支配者集団であるフトゥーワと対になるのが、ハラーフィーシュである。この語はフトゥーワよりもさらにその意味が曖昧で、かつそれが指すものは時代によって大きく変化を見せる。元来は「流浪者、無頼人」を意味したようだが、後には乞食を含めた町の最下層を形成する人々全体を指すようになる。[22]一九世紀の始め頃からは、下層の人々からいわゆる一般民衆までを指す用法も生まれる。しかし、マフフーズの青年時代、すでにこの語はほとんど忘れ去られ、日常で使用されることはなかったらしい。

マフフーズの用法に関して言うと、彼とその仲間たちがたまたま、庶民、民衆を意味することばとしてこのハラーフィーシュということばを知って自分たちのグループを呼ぶのに最適だと考えたというエピソードがあり、[23]『ハラーフィーシュの詩』での用法も、これと同じと考えていいだろう。権威も権力も何

もたない普通の人々、その土地に根付いた生活を送る民衆、という意味でこの語は使われているのである。これに加えて見落としてならないのは、マフフーズの理解ではこのハラーフィーシュのイメージがカイロの下町の人々、生粋のカイロっ子を指すイブヌル・バラドのそれと重なり、彼らこそがもっとも良い意味でのエジプト人らしさを持っている真のエジプト人であるという評価が入り込んでいるという点である。[24]

一言で言えば、フトゥーワとハラーフィーシュとの関係は、「権力者」「支配者」対「民衆」「被支配者」ということになろう。[25] しかしそれを敢えてマフフーズがフトゥーワとハラーフィーシュの関係として見せたのは、これらふたつの概念がエジプトの伝統的な世界、特に旧市街の下町に見られる民衆的な世界というコンテクストに張り付いたものとマフフーズが考えたからである。フトゥーワは単に支配者、権力者なのではなく、すでに指摘したようにそれが背後に抱える文化、エジプトの民衆が連綿として受け継いできた固有の社会制度や人間関係のあり方までをも想起させるものである。ハラーフィーシュもまた、「民衆」というような文化的制約から自由な概念とは違い、少なくともマフフーズの解釈においては、エジプトの庶民の生活に根づく伝統的な価値観や生活様式を我がものとする人々を指しているという点において重要なのである。これによってマフフーズのメッセージは、抑圧された者の解放、民衆参加による社会改革といった普遍性を失わないまま、エジプトの人々に自らの問題として考えることを迫る力を獲得する。

こうしたフトゥーワやハラーフィーシュが生きる空間として、『ハラーフィーシュの詩』の舞台となっている街区というものが、ひとつの有機的な集団として描かれていることにも注意を払いたい。街区は、フトゥーワという支配者集団を内側から生みだし時にはそれを排除するメカニズムを持ち、良くも悪しくも命運を共にする。街区は自律性を持ち濃密な人間関係に結ばれたひとつの運命共同体として作品の中にその姿を現している。マフフーズが描いた街区は、エジプトの縮図たることを意図されている。

外の世界と明らかに区別された一つの完結した単位としてのこの街区の扱いが、実際の街区の姿と重なっていることは、街区というものがひとつの閉ざされた空間からなっていることを思うとより理解しやすいだろう。カイロの地図を広げてみれば一目瞭然だが、新市街と旧市街が決定的に異なるのは、新市街では道が碁盤目状に広がっているのに対して、旧市街にはそのような道の広がりはないという点だ。簡略化された地図では、旧市街にはほとんど道が書き込まれていない場合も多い。その理由はこうである。旧市街は基本的には街区の集まりから構成されている。そして街区というものは、現在ではその姿を変えてしまったものが多いが、元来は大通りに向けては二カ所程度しか開けておらず、夜にはそれすら門で閉ざされる。門の内側には、中通りに面して木の枝状に袋小路が広がっている。であるから、街区の集まりとして成立する旧市街には、通過すべき道として地図に書き込まれるに値するような通りは極端に少ないのである。大通りから街区に一歩足を踏み入れるということは、新市街にあるひとつの道に身を置くこととは意味がまったく異なる。どこか他の場所に移動するための通過点として街区に入るということは通常考えられない。そこの住人か、あるい

はそこの住人に用のある人間でなければ入り込む正当な理由は何もないと言ってもいいだろう。街区という場所にいるということは、そこでの暮らしに関わり合いを持つということを意味する。我々の日常で例えられるものがあるとするならば、一件の家であれ、庭先であれ、他人の生活空間に足を踏み入れるときの感覚と似ているかもしれない。街区の作りは、街区という世界が持つ独特の空気と無関係ではない。

物語には、この街区に隣接したふたつの場所が登場した。そのふたつとは、それぞれ荒野、墓地と訳したハラー khalā' とカラーファ qarāfa である。まず墓地と訳したカラーファとは、「死者の町」という通称を与えられているカイロの東、旧市街のさらに先にある墓地のことである。「死者の町」という通称が示すとおり、この墓地はミニチュア版の町の様相を呈している。つまり、一件の家の縮小版のような墓が並んでいるのである。実際、「死者の町」は現在はその作りを利用して住みついた人々に占領されスラムと化しており、物語の中、アーシュールJr.の家族が街区を追われた後、墓地に行って生活を始めるという設定はまったく非現実的ではない。

作中、墓地は死者であれ、生者であれ、街区にいることが許されない者の行き場、街区という社会から放逐された者の行き着く先であり、街区の対立項として捉えられる。しかしながら、一方で新市街とは違う扱いを受けていることもまた理解されねばならない。アーシュールJr.の兄を始め、新市街に出ていった者は落後していくのであれ成功の階段を上るのであれ、その存在の意味は街区とは切り離され、街区の命運にはなんの意味も持たない。それに対して墓地にとどまる者は、街区という知り尽くした世界からいったん距離を置き、なお離れ去ってしまわぬままに、再び見慣れぬ目でその見知った世界を見直すのである。墓地が街区という存在を通して意味を持ち、そこに生活する人は街区の人々との関係性の中で自らの生に意味づけをしていくのに対して、新市街はあたかも異国のような扱いを受ける。アーシュールJr.は兄のように新市街へは出ず、墓地にとどまることによって、街区の人間として生きる選択をする。

では、荒野とはいったい何を象徴するのであろうか。ここでは荒野と訳したハラーとは、街区に隣接した「死者の町」のさらに外側に広がる荒野を指している。ハラーは元来、「空虚」、「空っぽ」を意味する語であるが、まさに作品の中でも、人間およびその生活にまつわる雑多なものに満ちあふれる街区と対称をなしているのである。荒野で、人はあらゆる制約から解き放たれる。荒野は先祖のアーシュールとアーシュールJr.がひとり瞑想に耽り、ひらめきを得、神秘的な体験を経て覚醒し、優れた指導者として生まれ変わる場所である。

注意しておきたいのは、墓地と荒野の双方が街区と対をなしつつも、その二組の図式の間にある違いである。墓地が街区という日常的生活空間とつながりを持ち、いわばその周縁部分を形成し、それとの連続性において存在の意味を持っているのに対して、荒野の方は日常的生活空間およびその価値を超越した場である。つまり墓地と街区のふたつが、共同体の規範が隅々まで支配する空間とそれが不完全な欠けた形で存在する空間として関係を結ぶのに対して、荒野は街区と墓地の両方を合わせたもの、つまり人間が創りだした世界の全体を突き放す場として存在するのである。荒野に身を置いたとき、二人のアー

シュールは一人の人間として街区の論理から一度完全に解き放たれている。

街区というひとつの社会の改革者であるアーシュールJr.は、ひとたび墓地に身を置きその社会の論理を相対化する。そしてその上で、さらに荒野へ身を移し神のみと向き合う。彼はそこでの経験を経て真の覚醒を得た者として、新しい社会を創り出す指導者との役割を果たす。[26]こうしてマフフーズの思想は、旧市街やその周辺を舞台にし、エジプトの土着の要素をふんだんに盛り込んだ物語という姿を取ることにより、新しい生命力を獲得する。祖国エジプトが持つ可能性、より良い未来に向けて辿るべき道が、真にエジプト人の物語として描き出される。

7　結びにかえて

マフフーズは、祖国エジプトがその内側からより良い社会、より公正な社会、より理想的な社会を生み出していく可能性を信じる。エジプトの人々が自らの手で指導者を選び出し、必要であればそれを排除し、社会を変えていく可能性を信じる。エジプトの人々が、神の意志とのふれあいのなかで、同胞すべての救済を求めて行動すべく自己変容を遂げる可能性を信じる。社会主義やナショナリズムといった外来の思想を持ち出さなくとも、エジプトが内に持つ知的、文化的遺産の中から可能性は生まれる。ハラーフィーシュが自らの手で理想社会を獲得し得るように、エジプト人はエジプト人の論理によってより良い社会を築く可能性を持つ。マフフーズはこの信念を、旧市街のひとつの街区を舞台にして、民衆の生活空間の中に埋め込んで見せた。

(1) Jamal al-Ghitani, *Najīb Maḥfūẓ Yatadhakkar*, Beirut, 1980, p.10.
(2) al-Ghitani, p.20.
(3) al-Ghitani, p.26.
(4) al-Ghitani, p.70.
文化的な真正性（aṣāla）というのは、西洋からの文化的な影響を前にしてエジプト人としての文化的アイデンティティーを守るための重要な要素として、エジプト人知識人が議論の対象とした概念である。
(5) エジプトでは、マルコによる宣教以来続いてきたキリスト教の伝統を今も守る、つまり七世紀のアラブの征服によってもイスラムに改宗しなかった人々が人口の約一〇％を占めている。
(6) 「国民文学」については下記を参考にされたい。
J. Brugman, *An Introduction to the History of Modern Arabic Literature in Egypt*, Leiden, 1984, pp.249-252.
なお、エジプト初の近代小説と評価されるフセイン・ハイカルの『ザイナブ』(1913)はこの「国民文学」の典型である。エジプトの近代小説の大成者がマフフーズとされることを考えると、「国民文学」の歴史はすなわち黎明期にあったエジプトの小説の歴史そのものであると言えるかもしれない。
(7) 実際、古代エジプト（文明）への関心というのも、「国民文学」の特徴の一つであり、マフフーズの最初の3つの作品はこれを踏襲している。しかし、すぐに彼は作品の舞台を現代のカイロに移している。
(8) ʿAdil Nashid, *Tharthara ʿala al-Baḥr*, Cairo, 1993, p.33.
(9) 「社会主義的スーフィズム」(al-taṣawwuf al-ishtirākī) は一九六〇年一月二日の Jumuhūriyya 紙に掲載されたインタビューの中で最初に提示されている。しかしこのときには、「神を求めること、そういう生」「それを実現するためには社会的公正、平等が必要」というだけであまり具体的な議論はされていない。また一九六〇年というのはまさにマフフーズの作品にスーフィズムの要素が登場し始めた時であることを考えると、「社会主義的スーフィズム」はその後時間をかけてそのイメージが熟成されたものであると思われる。
(10) マフフーズが関心を示したのがなぜ他の潮流ではなくスーフィズム

であったのかについては、拙稿で論じているので参考にされたい。
Kumiko Yagi, *Naguib Mahfouz's 'Socialistic Sufism': An Intellectual Odyssey from the Waḥd to Islamic Mysticism*, 2001 (unpublished Ph.D. thesis)

(11) ここで見落とせないのは、マフフーズが使う技法である。タキーヤから聞こえてくる詩がペルシャ語であり、その言葉の意味は登場人物達には解せないという設定だ。それでもなお、彼らは心惹かれる。つまり、言葉を超えた何かが伝わった、あるいは言語を排除したメッセージがそこにあるということだ。また、タキーヤは街区に暮らす人々に門戸を開くことはないが、しかしそれにもかかわらず人々の苦難や喜びに無関心でない。それは、聞こえてくる詩の内容が、いつもそれを聴く人々の思いに応えるものであることが語っている。聴いている者には意味はわからないにもかかわらず、そこに歌われているハーフィズによるペルシャ語の神秘詩は、いつも苦しむ者を癒し、迷う者を導く内容である。

(12) *Malḥamat al-Ḥarāfish*, Cairo, n.d. p.19.

(13) 物語に登場するどの人物に対しても、タキーヤは苦難から逃避するための避難所を提供することはないという点は注意しておかなければならない。マフフーズはスーフィズムが社会からの逃避の場として消極的な意味を持つ危険性を熟知していた。

(14) *Malḥamat al-Ḥarāfish*, p.61.

(15) *Malḥamat al-Ḥarāfish*, p.85.

(16) たとえば、『乞食』(1965) に登場する、自己の救済を求めて、職も家族も捨てて隠遁生活に入る主人公ウマルの試みが結局失敗に終わるというのはその典型である。

(17) *Malḥamat al-Ḥarāfish*, p.491.

(18) *Malḥamat al-Ḥarāfish*, pp.547-548.

(19) *Malḥamat al-Ḥarāfish*, pp.552-553.

(20) *Malḥamat al-Ḥarāfish*, p.567.

(21) Sawsan El-Messiri, 'The changing role of the futuwwa in the social structure of Cairo' in Gellner & Waterbury eds. *Patrons and Clients in Mediterranean Societies*, pp.239-240

(22) W.M.Brinner, 'ḤARFUSH', *Encyclopaedia of Islam*, vol.2. p.206. Rasheed El-Enany, *Naguib Mahfouz: the Pursuit of Meaning*, London, 1993, p.240. Mustafa 'Abd al-Ghani, Al-Thawra wa-l-Taṣawwuf, Cairo, 1994, p.77; Matti Moosa, The Early Novels of Naguib Mahfouz: Images of Modern Egypt, Florida, 1994, p.3.

(23) Raja' al-Naqqash, *Najīb Maḥfūẓ : Ṣaḥfāt min Mudhakkirātihi wa-Adwā'Jadīda li Adabihi wa-Ḥayātihi*, Cairo, 1998 , p.33.

(24) Mahmud Fawzi, *I'tirāfāt Najīb Maḥfūẓ*, Cairo, n.d. p.20. イブヌル・バラドの概念については次を参考にされたい。Sawsan el-Messiri, *Ibn al-Balad: a Concept of Egyptian Identity*, Leiden, 1978.

(25) 支配関係においてはフトゥーワとハラーフィーシュは対立項でありながら、両者は断絶されておらず、フトゥーワはハラーフィーシュのなかから力を持った者が作り上げるという関係にあることにも注意を喚起しておきたい。

(26) 先祖のアーシュールは街区から直接荒野へ向かうのに対して、アーシュールJr.はいったん墓地に身を置いてそこから荒野に出向くという違いがあるが、この違いは今見た墓地と荒野が意味するものの違いから説明できる。先祖のアーシュールの場合、日常的空間である街区が疫病という天意によっていったん破壊されてしまうのであるから、街区という世界の意味を問い直したり、批判的に見るという手続きを踏む必要はない。彼の使命は新しい社会を一から創りあげることであり、それに必要なのは、その使命を果たすのに十分な覚醒を得ることだけであった。